

序論)

2022年10月から約2年半、私たちが読んできたイザヤ書もいよいよ最後の66章となりました。66章はイザヤ書全体の最終章に相応しい章となっており、裁きと祝福を交互に語りながら、私たちに信仰の選択を求めている箇所となっています。

今日の箇所は、その第一弾として【主】を恐れて歩むことを選ぶのか、自分勝手に生きることを選ぶのかを問われている箇所となっています。

1) 神殿信仰を持つ者へ ～【主】は霊が砕かれ、【主】を恐れる者を見る～

まずは、イスラエル人にとってエルサレム神殿というのはどのようなものだったのかを見てみましょう。

最初のエルサレム神殿を建てたソロモンは、エルサレム神殿の献堂式の時に、このように言いました。

I 列王記 8:27

それにしても、神は、はたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。

これは、神様は、ご自身がお造りになった世界に収まりきるようなお方ではないほどの偉大なお方であり、ましてや人が作った神殿などに収まるお方ではない。ということを示しています。

ソロモンは【主】がどれほど偉大なお方であるのかわかっていました。

そして、その上で、彼は神様にこのようにお願いをしました。

I 列王記

8:28 あなたのしもべの祈りと願いに御顔を向けてください。私の神、【主】よ。あなたのしもべが、今日、御前にささげる叫びと祈りを聞いてください。

8:29 そして、この宮、すなわち『わたしの名をそこに置く』とあなたが言われたこの場所に、夜も昼も御目を開き、あなたのしもべがこの場所に向かってささげる祈りを聞いてください。

つまり、エルサレム神殿というのは、神様が住む家というよりは、この世界に収

まりきれない超越者である神様に向かって、心からの祈りを捧げる場所だったわけです。

ところが、イザヤ時代のイスラエル人たちは、自分たちにはエルサレム神殿があるから大丈夫、ここで生贄をささげていれば自分たちは守られると思い込んでいたのです。いうなれば、神様ご自身に心からより頼むのではなくって、エルサレム神殿という建物に依存した信仰。そのエルサレム神殿という建物こそが、自分たちが神の民であり、【主】に守られる証拠だと思っていたのです。

そんな神殿信仰と言えるような考え方をしていた人々に向かって、エルサレム神殿が大事なのではないということを教えておられるのが先程よんだ 1,2 節です。今度はイザヤ書の 1 節と 2 節の前半を読みましょう。

66:1 【主】はこう言われる。「天はわたしの王座、地はわたしの足台。

あなたがたがわたしのために建てる家は、いったいどこにあるのか。

わたしの安息の場は、いったいどこにあるのか。

66:2a これらすべては、わたしの手が造った。

それで、これらすべては存在するのだ。

1 節の「天はわたしの王座、地はわたしの足台」という言い方が、ソロモンのことばと食い違っているように思いますが、言いたいことは同じです。神様にとって天も地も、神様の王座や足台程度でしかないのです。この世界は、決して神様のすべてを収めきることなどできず、ましてや人が作ったエルサレム神殿が、神様の家となって神様に安息を与えるわけがないのです。

イスラエルの人たちはある意味で、自分たちが神様の居場所を作っただけだと思いがちだったのかもしれませんが、でも、それらは結局神様がお造りになった被造物の一つでしかなかったのです。

私が 13 年前、この富川福音教会に来て思ったことは 20 数名の信徒の教会なのに随分立派な会堂があるということでした。私が牧師の子どもとして最初に過ごした静岡の教会は 30 名から多い時は 50 名ぐらい集まる教会でしたが、会堂はもっともっと小さい教会でした。だから、この会堂を見た時、信徒の方がそうとう頑張っただけでこの会堂を建てたのだらうと思いました。

振内の新会堂のときも思いましたが、会堂建築というのは大きな恵みであり、喜びです。ソロモンもエルサレム神殿の建築をした時には大きな喜びをもって、その神殿を【主】に献げました。でも、私たちの信じる【主】はこの会堂に収まりきる

お方ではないし、エルサレム神殿に収まるお方でもありません。

私たちは、ただ【主】の恵みによってこの世界が創造され、その恵みの一つとして、この会堂が与えられたのです。富川福音教会では、今年、献堂 40 周年の記念霊をしますが、この会堂は私たちが建てたからあるのではなく、【主】がこの世界をお造りになったから、ここに在るということを感じたいと思います。

2 節で【主】が、

66:2a これらすべては、わたしの手が造った。

それで、これらすべては存在するのだ。

と言われている通りですね。だから、私たちは建物を誇り、建物に依存する信仰ではなく、この建物があるこの世界をお造りになった【主】にいつも焦点を当てる信仰を持っていきたいと思います。

なぜならば、【主】ご自身が見ておられるのも、建物ではないからです。

2 節の後半の箇所を見ましょう。

66:2b ——【主】のことば——

わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、わたしのことばにおののく者だ。

「わたしが目を留める者」という箇所は、「この者をわたしは見る」と訳した方がより直訳的になります。【主】は確かに見られるのです。

誰を？「貧しい者」「霊の砕かれた者」「【主】のことばにおののく者」をです。

「貧しい者」とは、徹底的にうち叩かれて絶望している状態の人のことです。社会的に言えば最底辺に位置している人、いじめられ、搾取され、得ることより失うことのほうが多い人たちのことです。つまり、实际的、現実的に助けが必要な人のことです。【主】は徹底的に打ちひしがれていて、自分ではどうにもならない人を見られるお方なのです。

「霊の砕かれた者」とは、霊的弱者・・・つまり、罪によってボロボロになっている人のことです。自分が【主】の前でいかに罪深く、とるに足りないものなのかを自覚し、魂の救いを心から求めている人を【主】は見られるのです。

そして、「【主】のことばにおののく者」とは、直訳すると「【主】のことばの前

に震える者」です。【主】のことばをただの情報や知識ではなく、まさに神様ご自身が今の自分に語られていることばとして受け取り、自分の存在を根本から正す真実なことばとして受け取る人のことです。

【主】は、実際に苦しくて、苦しくて助けを求めている人、罪の大きさを自覚して霊的にボロボロになっている人、そして、【主】のことばをまさに今、自分を正すために神様ご自身が自分に向かって語っておられることばとして、恐れをもって震えながら受け取る者に目を向け、見られるのです。

当然、ここでいう「見る」とは、傍観者として見るということではなく、実際に私たちを助けるために目を留めてくださることを意味しています。

みなさん、私たちは現実的な自分の苦しみを【主】の前にさらけ出しているでしょうか。自分の罪深さを自覚しているでしょうか。そして、この【主】のことばを、ただの情報、知識としてではなく、今、まさに「私を正すために」「あなたを正すために」【主】ご自身がリアルに語っておられることばとして、恐れをもって受け取り、【主】が語られたことばに自分を合わせようとしているでしょうか。

私たちはこのような姿勢をもって【主】に祈り求めることが必要なのです。

2) 偽りの礼拝をする者へ ～忌まわしい者を選んだ者は厳しく扱われる～

ところがイスラエルの人たちは、神殿という建物で礼拝をしていればそれでいいと思っており、彼らの生き方そのものを【主】のみことばに合わせようとはしていなかったのです。3節を読みましょう。

66:3 牛を屠る者が、人を打ち殺す者。

羊をいけにえにする者が、犬の首を折る者。

穀物のささげ物を献げる者が、豚の血を献げる者。

乳香を記念として献げる者が、偶像をたたえる者。

実に彼らは自分の道を選び、そのたましいは忌まわしいものを喜ぶ。

これは非常に皮肉的な表現です。青字の部分。牛を屠る。羊のいけにえをする。穀物の献げ物をする。乳香を記念として捧げる。これらは【主】が定められた献げ物です。イスラエルの人たちは、その定めに従って献げ物を献げ、礼拝をしていました。ここだけみれば、非常に信仰深い人たちの歩みのように思えます。

でも、彼らの日常生活における実態は、そうではなかったのです。【主】は彼ら

のことをなんと言っているのでしょうか。赤字の部分です。人を打ち殺す者、犬の首を折る者、豚の血を献げる者、偶像をたたえる者と言われていました。

殺人は罪の代表であり、犬の首を折るとは律法で汚れた動物はその首をおらなければいけないと定められていますから、つまり、献げ者として役に立たないものを用意している人のことです。豚は汚れた動物の代表であり、当然、豚の血は【主】に受け入れられない献げ物です。その上で彼らが偶像をたたえて偶像礼拝をしていたのです。

神殿では、神様に喜ばれる生贄をささげているように振る舞いながら、その実態は、罪を犯し、神様の前で無役なものを用意し、神様に受け入れられない献げ物を献げ、そして、偶像礼拝をしていた。それが当時のイスラエルの人たちの生き方でした。

私たちはどうでしょうか。こうして毎週、会堂で礼拝を献げながら、その実態がイスラエルの人たちと同じような状況になっていないでしょうか。

毎週の礼拝はしているけども、日々の生活の中で罪を犯しながらもそれを悔いることがなく、【主】の役に立たないような歩みをし、【主】が喜ばれない形だけの祈りや賛美をささげ、そして、最終的には【主】ではなく、この世の力に頼っている。そんな歩みをしていないでしょうか。【主】は言われます。4節

66:4 わたしも彼らを厳しく扱うことを選び、彼らに恐怖をもたらす。

それは、わたしが呼んでもだれも答えず、わたしが語りかけても聞かず、わたしの目に悪であることを行い、わたしの喜ばないことを選んだからだ。」

65章でも語られていましたが、【主】はいつも私たちを呼び、私たちに語りかけてくださっているのです。それなのに、その神様のことばを無視して、自分の都合、自分の思い、自分が喜ぶことを優先していくのならば、それがその人の選択であり、その選択に対して、【主】はそれ相応に厳しい扱いをされると言われています。

みなさん、みなさんは日々の歩みの中で【主】に喜んでいただくことを選んでおられるでしょうか。それとも自分が喜ぶことを選んでおられるでしょうか。

その選択が、信仰者にとって重要な選択なのです。

ボンヘッファーという人がいました。彼はドイツの著名な神学者であり、牧師でした。彼はキリスト教の教えと信仰は、単なる儀式や形式を守ることでなく、社会正義や【主】が愛しておられる人間の尊厳を守るために生きることだと信じていま

した。

だから彼は、ヒットラーの独裁を許し、ユダヤ人迫害をしていたナチス政権に対して批判の声をあげ、積極的に立ち向かっていきました。みなさん、ドイツ人がナチスに抵抗するって大変なことではないですか。ドイツ人として周りに合わせていれば自分の身を守ることができるのに、彼はあえて隣人を愛せよという【主】の教えに従うことを選択して、殉教していったのです。

みなさん、【主】に喜ばれることを選択して生きるとはこうゆうことです。例えなにかを犠牲にしなければいけなかったとしても、【主】が喜ばれることを選び、実践していく。【主】はそのような人を見て、その人と共に歩んでくださるのです。

3) 【主】を恐れる者へ ～お前たちを迫害した者は恥をみる～

イザヤ時代、多くの人が偽善的な礼拝、神殿という建物に依存した生活をしている状況にあって、それでも【主】を恐れ、【主】に喜ばれることを選んで歩むことは、簡単な道ではありませんでした。

私たちが【主】の前で正しい選択をしようとするとき、往々にしてこの世の人たちは攻撃をしかけてきます。墮落したイスラエルの中にあつて、それでも【主】のことばに従おうとしていた人たちは、迫害されていたようです。

しかし、【主】はそのような人たちに5節のように言われています。

66:5 主のことばにおののく者たちよ、【主】のことばを聞け。

「あなたがたを憎み、わたしの名のゆえにあなたがたを押しつける、あなたがたの同胞は言った。『【主】に栄光を現させよ。おまえたちの楽しみを見てやろう』と。しかし、彼らは恥を見る。」

イスラエルの人々のことばは非常に高慢なことばですね。「【主】に栄光を現させよ。おまえたちの楽しみを見てやろう」これはつまり「そんなに熱心に【主】を信仰するなら、【主】に奇跡を起こさせてみろよ。俺達が本当に【主】が助けるのか見てやろう」と言っているのです。

この世の人たちは、【主】の助けなんて在るわけがないと決めつけています。でも、【主】はなんとされていますか？「しかし、彼らは恥を見る。」つまり、【主】の助けなんてないと思っている人たちが、実際に【主】を恐れ従う者を【主】が助けてくださるのを見て自分たちの間違いを知るようになると言われています。

るのです。

みなさん、【主】のことばを恐れ、【主】に従う者を【主】は見られ、実際に助けをくださるお方なのです。

結論)

みなさん、みなさんの信仰はどこにあるでしょうか。富川福音教会、振内チャペルという会堂でしょうか。または、毎日礼拝をしているという事実でしょうか。それとも、毎週の礼拝献金、月定献金をしているということでしょうか。

【主】は、建物とか、私たちの慣習的な行動を見られるのではなく、私たちは本当の意味で、【主】に助けを求めているのか、自分の罪を心から悔いて霊的に飢え渴きの中にあるのか、何より【主】のことばを自分を正す、現実的な自分へのメッセージとして受け止め、それを恐れ、おののきつつも、実際に従おうとしているのかを見ておられるのです。

マンネリ化した週間ではなく、実際的に【主】のみことばに従うことは、もしかしたら何等かの犠牲を払わなければいけないことかもしれません。自分がやりたいことを後回しにしたり、自分の時間をささげたり、時にはボンヘッファーのように自分のいのちさえ犠牲にすることを覚悟して、従わなければいけないかもしれません。

それでも、この世の流れに合わせるのではなく、【主】に喜ばれることを第一に選び取っていきましょう。

【主】は、【主】に喜ばれることを選ばなかった人たちに、厳しい対応をされ、【主】のみことばに従う道を選び、【主】に喜ばれる歩みを選択した人に目を留められ、その正しさを確かに示してくださるお方です。

【主】が真実を示してくださることを信じて、【主】のことばを恐れつつ、【主】に喜ばれる人生を選ぶ者となっていきましょう。

★応答のすすめ

神の御前で静かに黙想しましょう。

今日、主はあなたに何を語りかけられましたか？

建物や儀式ではなく、霊の砕かれた者、御言葉におののく者に目を留められる神様の前に、あなたは今、どのような思いでいますか？

あなたは今まで、神様の御言葉を今まさに自分に対して語られていることば、自分の生き方を正すために語られているリアルなことばとして、恐れつつ受け入れ、従おうとしておられたでしょうか。それとも、一つの情報、知識として受け取ってこられたでしょうか。自分の神様のことばに対する姿勢が恐れを伴ったものであったかを考えてみましょう。

そして、私たちの日常生活において、自分が喜ぶことではなく、主に喜ばれることを選ぶとはどういうことでしょうか。今週、あなたはができる【主】に喜ばれることとはどのようなことでしょうか？

主が私たちの内に働かれ、主に喜ばれる選択ができるよう、心を開いて祈りながら、応答の決心を書く時を持ちましょう。